

# MIOTSUKUSHI

漣標  
みおつくし

2000年10月20日発行

No.77

大阪府青年国際交流機構  
会長 松本仁孝



## CONTENTS

世界船オリエンテーション報告  
東南アジアオリエンテーション報告  
とっておき見聞録!  
アメリカ/韓国/スペイン  
LONG TIME NO SEE

みんなでいっしょに 遊びましょ!

## Report

## 世界船オリエンテーション



今年の世界船事業参加者へのオリエンテーションは、6月25日、兵庫県と大阪府合同で、たまたま神戸港に寄港していたにっぽん丸の中で行われました。にっぽん丸に再び乗船できるとあって、既参加青年も多く集まりました。実際の船の中でのオリエンテーションで熱のこもった質問が飛び交いました。現在、徳島に日本語の勉強のため留学中のベネズエラ出身のエレインさんも当日参加し、再び体験した船の感動について、書いてくれました。

## Nippon Maru: A sailing that never ends."

Elaine.

Be part of Nippon Maru really made a difference in our lives. We have discovered a new world beyond frontiers. Love is the bridge we cross over all the cultural differences, religion, race and language. And we realize the true: there is just one big family.

One of the most important things we learn is to always pursue our dreams because we know everything we truly wish comes true. Nothing is impossible. We already lived the most extraordinary experience we had never imagined before.

After the program SWY 11, I kept on studying Japanese language in Venezuela and applied for scholarship to study my major in Orthodontics. On August last year I got the most wonderful news in my life. I was coming back to Japan on April 2000 to study at The University of Tokushima.

While living in Japan I got the opportunity of visiting Nippon Maru again, at Kobe port. It was my first time to see it since that sad day I had to say good-bye to my dear SWY family. I can remember it like if it was yesterday.

I couldn't believe I was walking on the 6th floor, dolphin hall, my room at 3rd floor, and the dining room... so many memories came to me!

JPY's told me the right word in Japanese for that feeling: *natsukashii*, which means nostalgic.

But no words from any language in the world can express what we feel when we meet again the ship where we once lived the most beautiful dream of our life.

Be at Nippon Maru was great, but meet my friends from the ship was beyond great. They have become truly my new family in Japan. They are my brothers and sisters all over Japan, who have received me with open arms and lot of love.

Once somebody asked me if I missed the days I was in the ship. I said no... because everytime I am with one of my friends from the ship I am still at Nippon Maru. For me the Ship is the people. And we will always be together by heart for our special and unique tie, love and memories. And so, our trip on board Nippon Maru is a magic adventure that never ends.

～東ア船and育成交流オリエンテーション～

ようこそっ! *New PYs!!*

第23回東南アジア青年の船 野田 星奈

2000年7月...、新しい仲間がやってきました。「ドキドキ、ワクワク、ちょっと不安、ドーンッとコイツ!!」なあって、またまた十人十色の少し緊張した顔ぶれが私達の前に現れました。もうすぐ始まる「未知の世界」に胸を弾ませながら、毎日を過ごしているのかしら...。いやいや、世界船はただいま真っ最中ですね。どんな夢を見、描いているのかな?

7月12日、今年も関西のたくさんのNew PYが顔合わせをし、ex-PYsと共に関西事前研修を行いました。みんなで自己紹介をした後、各事業にわかれて詳しい事業内容の紹介、持ち物、日本紹介に向けての準備、ホームステイの様子、クラブ活動、日本からのお土産、事前研修の内容や係りについてなど、次から次に飛び出すトピックで、あっという間の2時間あまりを過ごしました。もちろん、我が「日本丸」についても!!(こりゃ失礼っ!東ア船の私情が入ってしまいました。)

ex-PYsは、思い出が多すぎて何から話していいのかが頭がこんがらがって、New PYsは、内容が大きすぎて何から質問すればいいのかがこんがらがって、そんなこんなを見ていると、「ああ、それだけすごい、そしてとっても素敵な事業なんだな...。」なんて改めて思っていました。とにかく、「一言では語り尽くせない。」そんな思いがそれぞれの事業のブースから感じられました。

ぜひぜひ、思いっきり楽しんで、充実した時間を友と共に過ごしてきてほしいと思います。

*Have a nice your trip!!*

# とっておき 見聞録! No.2

感想や質問をE-mailで送ってね!

韓国留学体験記

## 「心に残る一言」

11年日韓交流 及川ひろ絵

E-mail : oikawahiroe@hotmail.com



**皆** さん、お久しぶりです。99年度の日韓親善交流事業に参加させて頂いた及川です。

今年1月の総務庁帰国報告会が終わるやいなやまた韓国に飛んで参りました。今回までの訪韓では最長でも3週間程度の滞在しかしてなかったのですが、念願かなって約半年間、語学研修に行ってきた。韓国へは何回か行っていたものの、朝鮮・韓国語としての言葉の勉強は初めてでした。特に最初の3ヶ月間は今まで生きてきた中で最も勉強に集中できた時期(大げさな!?)だと思います。というのも、言葉が通じない、困った!という環境の中で生活してきたからだと思います。それは、韓国女子学生6人と共同生活をすることに起因すると思います。

私は小さい頃からクリスチャンホームで育ってきたのですが、その関係で教会の中にある、地方から出てきた学生の為のシスターズハウスというところに住まわせてもらうことができました。正直言うと、日本ではあまりいわゆる真面目なクリスチャンとは言い難い私でした。ですから、シスターズハウスに住むのも気が進まない部分もありましたが、語学の勉強の為に…なんて考えていたと思います。

シスター達は英語を専門としている学生がいなかったこともあり、彼女達との会話は専らジェスチャーと韓国語の他ありませんでした。共同生活するとなると、いろんな細かい問題も出てきて、今までの訪韓でのお客さんとして扱いは違います。何とかして彼女達とコミュニケーションをとらねば!との思いで身が入った勉強ができたのだと思います。そんな生活が始まって2ヶ月目にさしかかろうとしていた時、事件は起こりました。

何かお腹が痛いなぁとその日の一週間程前から感じてはいたのですが、きっとそのうち治るだろう、とのん気に構えていた時、その日はやってきました。激しい腹痛に襲われ病院へ担ぎ込まれた時、盲腸が爆発し腹膜炎に見舞われている疑いがあるとのこと、即刻手術が必要だ、と言われました。エッ!何だっって!!こんな経験

をするとは。しかも外国で…。無事手術を済ませたものの、2週間の入院が必要だと言われました。まだまだ言葉が通じない中で心の中は不安で一杯でした。けれども、この時が今まで生きてきて最も幸せでした。それは、同じ部屋で暮らすシスター達が毎日交代で私と一緒に病院に泊まり、看病してくれたからでした。それだけでなく、教会の方々や学校の友人、交流事業で知り合った韓国の友人達、たまたま旅行に来ていた日本の団員達が毎日、入れ代わり立ち代りお見舞いに来てくれ、私がいた病室は花で一杯でした。こんなにも多くの方々がこんなにちっぽけな私の為に助けを差し延べてくれる、と思うと心の中は感動で満たされました。私が感謝の言葉を言うと、決まってシスター達は言ってくれました。「ウリヌンハナエヨ(私達は一つ)」だから気にするな、これは当たり前なことだ、と。また、シスター達はこの言葉を通してこう言いたかったのだと思います。

「私達は一つ屋根の下に一緒に住んでいる一つ家族なんだよ。だから韓国人も日本人もここでは一つだよ。」と。

共同生活をしていたものの、それぞれ忙しくなかなか一人一人と向き合って話す時間がそれまでは無かったのですが、この機会を通してじっくりと話し合うことができました。それぞれの抱えている悩み、将来について等々、互いに意見を言い合うことで、互いに対する理解を深めることができたと思います。退院後の生活はこの経験があった為、自分そのままを出してシスターズハウスで何かの問題が合った時にぶつかることができました。それも「ウリヌンハナエヨ」この言葉があったからでした。韓国にもう一つの家族ができた、と感じています。

この経験を通して、さらにもっと韓国にはまっています。また韓国に行くつもりで、往復チケットも買ってきました。皆さんもそれぞれのご経験の中でいろんな形での交流をされてこられたと思います。でも、最も心に残るのはやはり人と人との交流ではないでしょうか。たくさんの人と人の交流の輪が国際関係を築いていくのだ、と改めて考えさせられました。今後も多くの家族を世界中に作れるよう、邁進していきたいと願っています。



### 私達は一つ屋根の下に一緒に住んでいる一つ家族

## とっておき見聞録!

## アメリカ留学体験記

## 「流れ」

第12回世界船参加 古宮 昇

E-mail : noboru@osaka-ue.ac.jp

**不** 安なぼくをのせて、旅客機は日本のエアポートを離れた。この巨大なジェット機は、機首を大きく持ち上げて急上昇している。ぼくは窓の外をずっと見続けている。虹が見えた。あれっ。なぜか見覚えがある。「あっ、あのときの虹だ!」スナッフィーが飛んでいったあとの、あの虹だ。

スナッフィーは、アメリカ合衆国のセサミストリートという子ども番組に出てくる、茶色い象のこと。ぼくはその象の物まねがうまくて、スナッフィーというあだ名をもらっていた。心理カウンセラーになりたい、と思っていたぼくは、ある大学教授の勧めで、その分野の最先進国であるアメリカ合衆国の大学院を目指すことにした。受験勉強も受験手続も、本当に大変だった。

ところが、受験した4大学院は全て不合格。家庭の事情もあって、ある日曜日の朝、「こりゃ、アメリカに行くのは無理かな」と、初めて本気で思った。あきらめなあかんかな、と思った。少したって眠くなり、昼寝をすると、夢の中に、スナッフィーがいた。孫悟空の「きんとん」みたいな小さな雲にのり、うれしそうな顔でぼくを見ていた。やがて、きんとんは音もなく浮き上がり、スナッフィーは遠く空のかなたに飛んでいってしまった。「スナッフィーがアメリカに行った」。ぼくには分かった。スナッフィーが消えた青空には、2,3片の雲が浮かび、きれいな虹がかかっていた。

外国になんの憧れもなかったぼくは、それまで日本を出たことがなかった。あの夢の翌年に、結局、合衆国東部のメリーランド州にある小さな州立大学に行けることになった。ぼくは、生まれて初めて日本を離れることになった。合衆国の大学院では、学期の平均点が80点を下回ると退学になることを聞いていた。見知らぬ外国で、違う言葉を話し、違う文化の中で、競争の厳しい大学院に行く。遠い国で、何がぼくを待っているのか知らなかった。

初めての国際線。飛行機が、すごいスピードで「ゴ、ゴ、ゴー」と小刻みに揺れながら滑走路から浮かび上がる。見知らぬ国で、これからどうなるのか。ぼくは本当に恐かった。離れて行く地面を見下ろしながら「Bye bye, Japan」とつぶやいた。涙が急にあふれ出た。その飛行機から見たのが、あの虹だった。

ぼくがメリーランド州の大学院に決めるまでの間に、大きな転機があった。カンザス大学から、秋学期が始まるたった10日ほど前に、合格通知が来たのだ。まったく突然のことだった。度重なる不合格通知のあとの、初めての合格通知。ぼくはすぐに入学の意思を大学に伝えた。悪夢をいっぺんに見たのはその夜のことだった。

1つ目は、白黒テレビスクリーンに真っ黒な日の丸が出され、アジ

ア人が雷に打たれた、というニュースだった。2つ目は、ぼくは中学校の授業に遅れた夢だった。怒った先生がぼくの体を担ぎ上げ、砂場に叩きつける寸前で夢が終わった。

朝になって目を覚ましたぼくは、とても嫌な気分だった。大きなインバクトの残る夢だった。ぼくは、入学の意思を取り消す手紙をカンザス大学に送った。それから2,3ヶ月したころだったろうか。せっかく手にした入学を自分からつぶしたぼくは、これで本当に合衆国に行けないのではないかと、思った。そしてあのスナッフィーの夢を見た。東部メリーランド州の大学院に旅立つことになったのは、その翌年だった。

あの小さな大学院に行ったことは本当に正解だった。「辛い」と思ったことは何度も何度もあったけど、先生達はとても親切で、教育の質もたいへん高かった。

ある日の教授会で、ぼくが博士課程に挑戦することを全員一致で薦める、という決議があったことを指導教官から知らされた。「時間的に効率的なのが良いことだ」と、信じていたあの頃のぼくは、「今の修士課程を終えたら即座に博士課程に進もう」と決めた。どこの博士課程を受験するか、資料を調べ始めた。

いやな夢を見だしたのは、その頃だった。「修士課程を卒業してすぐ博士課程に進むのは良くないことなのかな」という疑念が少し浮かんだ。でも、「それが悪いはずがない。できるだけ早く博士課程に入学するのが効率的だ」と疑念を打ち消し、資料に当たる毎日だった。へんな夢は続いた。ある夜の夢では、アライグマのようなものがぼくの指先に噛み付き、離れない。ぼくはそれをぶんぶん振り回すが、その生き物はぼくに執着する。ぼくはそれを壁に力いっぱい打ち付けるが、離れない。なんどもなんども打ち付けるが、離れない。そんな夢だった。「修士課程を終えたらすぐ博士課程に行くんだ、と執着しているぼくに警告を発している夢なのかな」とは思った。でも、夢によって大きな決断を変える勇氣はぼくにはなかった。

そんなある夜、短い夢を見た。人間の脳のイラストがあり、その中央あたりに傷があった。それだけの夢だった。目覚めたぼくは、その部分がWernicke's Areaとよばれる部位であることを授業で学んで覚えていた。でも、その部位がどんな役割をする部位なのかは忘れた。教科書を引くと、それは、言語理解に関連する重要な部位だった。その部位を傷付けられた人は、本を朗読はできても、言語理解ができないため意味が読み取れないのだそうだ。この夢の意味は何だろう。「お前はわしの言うことをさっぱり理解していない」。ガーンときた。夢がぼくにそう言っているんだ。ハッとした。ぼくは諦めた。夢に従うことに決めた。修士課程を卒業したら、就職してしばらく働こう。その夜から、気持ち悪い夢はピタリやんだ。

博士課程の資料を読むのはやめ、就職の資料を読み始めた。ノースダコタ州のある児童相談所の求人が目にとまり、室長に電話をした。短い電話だった。結局、ぼくはその相談室で雇われることになった。そこで働かせてもらいながら、ぼくはいつも、室長との出会いが運命的なものだったような気がしていた。室長もぼくにそ



## とっておき見聞録!

った。ぼくはその児童相談室で家族心理療法というものを学び、その経験がぼくの職業的方向を決定的に変えることになった。

ぼくは、結局アメリカ合衆国に8年あまり住み、そのち縁あって総務庁の交流事業に参加させていただいた。その間、いろいろなことを学んだ。その一つが、流れに従うこと。

ぼくたちはみんな、目的をもって生まれてきた。その目的にあった才能や興味を持って。ぼくたちひとりひとりに、いる場所があり、出会う人がいる。適切な時がある。川の流れに逆らった時に、ぼくらは流れの圧力を感じる。ぼくらが流れに逆らうのは、恐怖や欲のせいだ。「この人が欲しい」「あれを無くしたらどうしよう」「こんなことになってしまったらどうしよう」。

大切なものは何でも、いつも足りないと思える人がいる。愛、お金、時間、自分の価値、など。足りないと思うから、離さないようにとしがみつ、人にやるものか、と無理をする。流されないぞ、流されない

ぞ、と踏ん張って苦しむ。足りないと思えるから本当に足りなくなる。必要なだけいくらでもあるのに。

日本を初めて離れるあの時のぼくが不安に泣いたのも、合衆国の大学院に通いながら経験したたくさんの事を「辛い」と思ったのも、流れをぼくが信じなかったから。

欲と恐怖から離れ、楽に自然になったときに、夢や、こころのすみの小さな声が、流れに添った道を教えてくれる。どっちの道に進めばいいのか、理屈で考えたら、流れなんか感じられない。小さなメッセージを受け取る能力は筋肉みたいなもの。それを信じないで無視していると、どんどんしぼんでしまう。欲と恐怖の言葉しか知覚できなくなる。でも、注意し使っていると、だんだん小さなメッセージを受け取れるようになってくる。

流れのままに生きる。焦ったって仕方ないもの。

スペイン便り

## 「バレンシアの火祭り」

11回世界船 福盛 里織

E-mail : esaori6873@hotmail.com

**今**回は、今まで見たスペインのお祭りの中で私が一番好きな、バレンシアの火祭りについて報告したいと思います。

このお祭りはスペイン3大祭り(他はセビリアの春祭り、パンプローナの牛追い祭り)のひとつで3月中旬に行われるとても有名なものです。そのため、この季節はホテルは早くからの予約で満室となり、交通手段も早めに確保しないと大変です。私たちは、車で行きました。朝6時頃出発したので、ほとんど車もなくマドリッドから3時間ほどで到着しました。ホテルは取れなかったのでキャンプをしましたが、これもなかなか楽しかったです。ただ、マドリッドよりは暖かいと思っていたので、そんなに防寒具を持って行かなかったのですが、かなり冷えてみんなでくっついてお団子状態で眠りました。

お祭りの期間中は、街中、政治家やその年に話題になった人などを風刺した張子人形でいっぱい、又、火祭りという名前の通り、爆竹や花火などで耳が痛くなるくらいにぎやかです。それも半端じゃなくおもわず耳をふさいでしまったのですが、周りの人に、そうすると鼓膜が破れる危険があると注意されてしまいました。

夜も、またたくさんのお店が出ていて、チュロス(ドーナツ)を食べながら歩いていたり、バレンシアの民族衣装を着て歩いている

人にたくさん会いました。

最終日には、優勝した人形を残し、他すべての人形に豪快に火をつけて燃やしてしまいます。建物の2、3階くらいの高さのある人形を燃やすので、すごく迫力があり、また、とてもきれいでした。

一生懸命に時間をかけて作ったものを一瞬にして灰にしてしまうのはちょっともったいない気もしますが…。優勝した人形は博物館に集められて展示してあります。

火祭りを見たいけど3月はどうしても休みがとれないという方は、アリカンテというところでも同じようなお祭りが5月に行われるので、そちらに行かれてもいいかもしれません。海のあるきれいなところですよ。



**豪快な祭りにみんな大騒ぎ!**

LONG TIME NO SEE **おひさしぶりです!**

## 心の修行

昭和43年南米派遣 太田 俊弘

ある先輩より声をかけられてボーイスカウトのリーダーをする事になり、以来30数年、現在は団委員長として活動を続けております。その中でも海外派遣に参加させてもらったことで大変大きな体験をさせてもらいました。

南米コロンビアでは商社勤務の家族(長期滞在)の子供のこと、日本人なのか外国人なのか。またブラジルでは移民の家族小学6年生を頭に3人の子供のいる家庭を目の当たりにした時より、私は外国を股に掛けた貿易商を夢見たときがありました、その夢はもののみごとくに崩れてしまいました。一方、成功した日本人移民の家庭では、広大な敷地を持ち私達を招待してくれました。前日は牛一頭を我々一行の為に食肉として準備し、園遊会を開いてくれると言う場面、天と地の格差を体験しました。思い起こすと当時のことが走馬燈のようにかけめぐり、懐かしさがわき出てくるような気持ちでもこれとも思いながら、この文章を綴っています。

昭和43年以来32年を経過した今日、南米の変わり様は当時と比べる事の出来ぬほどびっくりするやら驚くやら……。回想するときがありません。また帰国後は事後活動や会運営のお手伝いやら約25年

間程役員として活動させてもらいました。次の若い方々へとバトンを引き継いでこの方、この厳しき不況の中を幸いなことに忙しく仕事をさせていただき頑張っております。若いときは若気のいたりでと通過してきましたが、今までしてきたことは、全て自分の勝手都合と思い、また自分の物差しで物事を判断し押しつけてきたように思われ、ただただその愚かさに反省するばかりの日々であります。

私がこのような心境の変化をさせてもらったのは、ある時、別の先輩より「心の修行」を勧められて以来、なぜか不思議なことに疑惑心の強い私が何も疑うことなく、素直にも先輩と共に仲間に入り、真似ことをさせてもらったのがきっかけとなり今も続けております。

「牛に引かれて善光寺参り」の様なものでした。自分の心の修行は自力ですもの、他力本願では出来るものではないようです。人間とは誠に勝手な動物で、自分の意に添わない物は全てはねのけ、受け入れようとはしない、自分をすぐに正当化する。なかなか修行したとおりに出来ないものだけれど、自分で理解をし、いささかなりとも心がけることにより、時の流れに身をゆだねることが出来るのではないかと思う毎日です。偉そうなことを書きましたが、自分がなかなか出来ない故、戒めとして皆様に発表すれば少しでも自らがその様な心境になれるのではと思ひ、勝手なことをしたためさせていただきました。

**滞標の印刷・発送は、皆様の会費で成り立っています。**

「あっ!忘れてた!」というあなた、同封の会費納入用紙を持って、今すぐ郵便局に足をお運びください。

**天神祭 花火を見る会** 田島 潤

そう、あれは1年前。東南アジア青年の船(以下、せあつぷと言う)に参加することになってから、初めて参加青年に会う機会だったのがこの天神祭り花火見物兼飲み会でした。あの日、せあつぷに参加する人はもちろん多数の人が参加して大いに盛り上がり、二次会にはラーメン食べに行ったものでした。今年また同じ会の招待が来て嬉しかったこと! 今までせあつぷ2000参加青年のために何も出来なかったからこの機会に、と思って非番で眠い目をこすりながら現場に行ったら、あれれ、今年のせあつぷ参加者はゼロ、その他は会長以下 若干6人。こんなん大阪IYEO内輪飲み会やないか!

ぼくの体験談なんて誰が聞く耳持つかいな、と内気な僕は思いながら失望の色を隠せず、ひたすら「みおつくし」編集長の手料理を食べる事飲み事1時間。しょぼい花火もその佳境を迎え、さてこれまで何を話したかと言えば仕事の紹介。話しベタな僕がそれ以上語れるかといえは無理な話。ひたすら会長や元世界船NLの話で場をつなぎきった時間でした。

…と、ここで終われば紹介する意味の無い失敗飲み会になっちゃう。しかあし! 1つ事後談が。この花火大会で初めて会って、わずか10分の電車ではしゃべった韓国派遣の諏訪君と職場で会ったのでした! 一見頼りなさげなこの大学院生は、しっかり僕の顔を覚えていてくれて、挨拶もしてくれたのでした。いやはや、これからもせあつぷ以外のひとと知り合いになれるのかなあと妙に嬉しくなった一幕でした。

**国分由佳を忘れないで!**

広報部長になり、滞標の編集に関わるようになって2年半。新しい連載をはじめたり、少しでも会員のみなさまに興味を持っていただけるよう努力し、軌道に乗ってきました。ところが、私、東京に引越すことになりました。皆様、原稿依頼をしてもいやな顔ひとつせず書いてくださり、どうもありがとうございました。この場を借りてお礼申し上げます。IYEOは全国各地に支部があるので、私のような転勤族が見知らぬ土地に行っても心配はありません。思えば、静岡から始まり、大阪、今度は東京。一生の間にいくつのIYEOをまわれるかしら?? また、どこかでお会いできる日を楽しみにしています!

国分

E-mail : EZV07777@nifty.ne.jp

**青春後記**

今、大平光代著「だからあなたも生きぬいて」を読み終えた。彼女は中学2年の時「いじめ」を苦にして自殺を図り、非行に走る。16歳で「極道の妻」になったが、ある人との出会いで立ち直り、29歳で「司法試験」に合格。現在、非行少年の更生に努める弁護士として東奔西走している。

本を読みながら、著者と一緒になり、怒り、悲しみ、涙し、人間に絶望し、そして人間に救われ、人間の素晴らしさに感動する自分がいた。人間の強さと弱さ、醜さと美しさ、恨みと感謝。それらが表裏一体となって私たちの周りには常に存在している。最近、時々もうこの世もおしまいだな、と思うことがある。あまりにも人間が墮落してしまい、信じられなくなってしまった。しかし、本当は人間の本質は昔から変わっていないのかもしれない。なぜなら人間の心の中にはそのどちらかが居座っているからだ。世界中の問題がすべて、人間の「欲」や「ねたみ」や「恨み」などからきているものだとしたら、どうすればそれを「愛」や「慈しみ」や「感謝」の気持ちに変えられるのだろう。

嘆くのはもうやめよう。社会や他人のせいにするのはもうやめよう。まず、自分から変わろう。きっと変わるに違いないから…。

OH NO!